

櫻井 喜吉 — わけへだてなく命を救う —

櫻井喜吉は、槻木村（現在の柴田町槻木）で診療所を開いていました。

ある夜のことでした。

「喜吉先生、開けてください。どうかこの子を、ミヨを助けてください。」

すがりつくようなその声に目を覚ました喜吉が戸を開けると、一人の母親が飛びこんできました。月明かりをたよりにのぞき

こむと、背中に小さな女の子をおぶっていました。母親の名はセツ。どうやら、船迫（現在の柴田町）から約三キロメートルあまりの夜道を歩いてきたようです。そのころ、船迫では病気が流行していました。さっそく診察室に招き入れ、横たえたその子の脈をとりました。喜吉は、すぐさま手おくれであることに気づきました。落ちくぼんだまぶた、小枝のようにやせ細った手足、とぎれとぎれの脈。手のほどこしような状態でした。診察の様子を見ていたセツが、

「先生、ミヨは、もう助かりませんか。」

と、不安そうに問いかけました。

「残念だが、もう少し早かったらなあ。」



櫻井 喜吉

その言葉を聞くやいなや、セツは声をあげて泣きくずれました。わが子の名をくり返し呼び続けるセツのさけびにも似た声だけが、静まりかえった部屋中に響き渡りました。そのセツの姿を、喜吉はじっと見つめていました。

そのころの船迫の人たちは、少しでも早く診察を受けたいと思っても、治療費も薬代もはらう余裕はありませんでした。だれよりも喜吉はそのことを知っていました。そのほかにも、船迫の人々が診察に来られない理由がありました。診療所までの奥州街道は、昼間でもうす暗く、夜になると追いはぎが出る危険な道でした。今でこそ車で十数分の距離ですが、当時の人々にとっては決して楽な道ではありませんでした。船迫には診療所はありません。このまま村中に病気が広がれば、命を落とす人が増える心配がありました。

「船迫の人たちを救えるのは、喜吉先生しかない。わたしもできるかぎり協力する。どうか頼む。」

現状を見かねた地元に住む大沼半左衛門と高橋兵十郎が、協力を申し出ました。考えぬいた末に、喜吉は船迫にも診療所を作り、日曜日に診察することにしました。さらに、治療費はすべて無料にし、薬代も喜吉が負担することにしました。こうして、「日曜診療所」が誕生しました。

喜吉はますます忙しくなりました。奥州街道を人力車でかけぬけながら、診察に通い続けました。日曜日が来るたびに、診療所は、喜吉の到着を待ちわびる人であふれかえりました。

「喜吉先生、喜吉先生。吐き気が止まらない。腹も痛くて夜も眠れない。一番にみてもらいたくて、ずっと先生を待っていました。」



追いはぎ：
通行人をおそって、
衣服や持ち物をう
ばいとる盗賊。

人力車：
人に乗せ、車夫が
引いて走る二輪車
(現在のタクシーの
ような役割の乗り
物)。



さっそく男を診察してみると、あばら骨が見えるほどやせ細ってしまいました。目もうつろで息も絶え絶えでした。かなり重い病気に違いない。このままほうっておいては命が危ない。喜吉はさっそく薬を用意して持たせ、おかげも差し出しました。

「本当にいいんですか。」

「安心なさい。あなたの喜ぶ顔を見ると、わたしも元気が出るのです。」

腰の曲がったその男は、何度も何度も頭を下げながら帰っていききました。

「先生、この子は昨日から体じゅうをかきむしって、とうとう血がにじんできました。何かとんでもない病気かと思うと心配で、心配で。」

「心配ご無用。体をきれいにふいて、この薬草をつけなさい。すぐに治るから安心なさい。」

喜吉は小さな女の子の手に薬をそっと置き、力強くにぎりしめながら言いました。女の子はにっこりとほほえみ、うなずきました。気がつくくと、もう日が沈みかけていました。喜吉はかさつく両手を洗いながら、ふうっと大きく息を吐き出しました。

喜吉が診察した病気は、リュウマチなどさまざまな種類にわたっていました。喜吉は昼も夜も夢中で働き、たくさんの方の命を救いました。

「喜吉先生は命の恩人だ。」

「先生、わたしにはお金はありませんが、家でとれた大根ならあります。どうかこれを受け取ってください。」

リュウマチ：
筋肉や関節などに
痛みを発する病気。
リュウマチともい
う。

いつしか日曜診療所には、喜吉をしたう人々が集まるようになりました。わけへだてなく人々の命を救うために全力を傾けた喜吉の姿は、地域の誇りとなりました。明治二十六（一八九三）年から、十一年間にわたって日曜診療所は開設され、診察した患者の数は二千七百人にのぼりました。

喜吉がこの世を去ったとき、人々はとても悲しみました。そして、喜吉の髪の毛をまつろうという声があがり、髪塚として今も船迫に残されています。「一人の命も無駄にしない」という思いを生涯つらぬき通した喜吉の思いや志は、時代を越えて今も語りつがれています。



櫻井喜吉の髪塚（柴田町）

櫻井喜吉

櫻井喜吉は、文久二（一八六二）年、槻木村（現在の柴田町槻木）に生まれ、医者として診療所を開いた。また、喜吉は、医者のいない同じ柴田町の船迫地区で、自分の診療所が休みである日曜日を診察日にあて、そこで無料で診療を行った。そして、貧しい人や病気で苦しむ人々を救った。

髪塚…
亡くなった人の髪の毛の一部をうずめて石碑を建ててまつったもの。